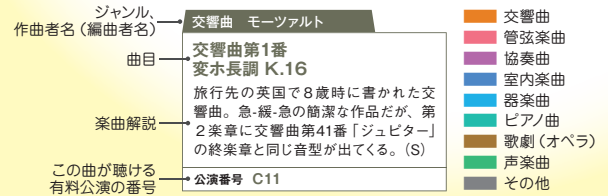


曲目ガイド

Program Notes



協奏曲 モーツァルト

ヴァイオリンとオーケストラのためのアダージョ ホ長調 K.261

ヴァイオリン協奏曲第5番を完成させた翌年、その緩徐楽章(第2楽章)として書き直したのが、この作品だといわれる。(Ko)

公演番号 H22

管弦楽曲

Orchestral music

協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第7番(3台のピアノのための協奏曲) へ長調 K.242

庇護者ロードウロン伯の夫人と娘達の演奏用に書いた、3台ピアノによる珍しい作品。モーツァルト自身も気に入って演奏していた。(Ko)

公演番号 H31

管弦楽曲 モーツァルト

セレナード第13番「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」ト長調 K.525

日本語に訳すと「小夜曲」という意味の弦楽アンサンブルのための作品。1787年作曲。4楽章形式だが、作曲動機は不明のまま。(K)

公演番号 C13、C23、H22

協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第9番 変ホ長調K.271「ジュノーム」

ザルツブルクを訪れたクラヴィアの名手、ジュノーム嬢に献呈。ピアニスティックな魅力あふれる、モーツァルト若き日の名作。(Ko)

公演番号 H11

管弦楽曲 モーツァルト

ディヴェルティメント 二長調 K.136

イタリア旅行から帰った翌年にK.136～138の3曲の「ディヴェルティメント(嬉遊曲)」が書かれた。その中で最も有名な作品がこれ。(K)

公演番号 H12

交響曲 モーツァルト

交響曲第35番 二長調 K.385「ハフナー」

ウィーン移住後最初の交響曲。ザルツブルクのハフナー一家のためのセレナードから編纂され、祝祭的で爽快な曲調をもつ。全4楽章。(S)

公演番号 C02、C33



協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第10番(2台のピアノのための協奏曲) 変ホ長調K.365

1年半の演奏旅行から戻った故郷で、姉と演奏するために書かれた2台ピアノのための作品。ザルツブルク時代最後のピアノ協奏曲。(Ko)

公演番号 H31

管弦楽曲 モーツァルト

ディヴェルティメント 変ロ長調 K.137

K.136～138とも1772年作曲。その中の2番目の作品で、アンダンテ～アレグロ・ディ・モルト～アレグロ・アツサイの3楽章で構成。(K)

公演番号 H32

交響曲 モーツァルト

交響曲第36番 八長調 K.425「リンツ」

ザルツブルク帰省から戻る途上のリンツにて4日(?)で書かれた作品。晴朗かつ優雅で活力をも湛えた音楽は充実著しい。全4楽章。(S)

公演番号 C21

交響曲

Symphony

協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第12番 イ長調 K.414

ウィーンに拠点を移した後、最初の予約演奏会のために書いたピアノ協奏曲の一つ。ウィーンの聴衆を意識した保守性と美しさをもつ。(Ko)

公演番号 A21(ハープ版)

管弦楽曲 モーツァルト

ディヴェルティメント へ長調 K.138

1772年、イタリアから帰国したばかりの頃の作品。10代のアマデウスが書いた傑作で「ザルツブルク・シンフォニー」とも呼ばれる。(K)

公演番号 C23

交響曲 モーツァルト

交響曲第38番 二長調 K.504「ブラハ」

『フィガロの結婚』の人気に沸くブラハで初演された円熟作。構成美と旋律美を相もつ全3楽章の濃密な作品で、長い序奏も特徴的。(S)

公演番号 C22

交響曲 モーツァルト

交響曲第1番 変ホ長調 K.16

旅行先の英国で8歳時に書かれた交響曲。急-緩-急の簡潔な作品だが、第2楽章に交響曲第41番「ジュピター」の終楽章と同じ音型が出てくる。(S)

公演番号 C11

協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第20番 二短調 K.466

初めての短調によるピアノ協奏曲。悲劇的な1楽章に始まり、2楽章のロマンスで美しい主題が歌われ、3楽章は力強く幕を閉じる。(Ko)

公演番号 OP(第2・3楽章)、C22

協奏曲

Concerto

交響曲 モーツァルト

交響曲第39番 変ホ長調 K.543

1788年に短期で完成された“三大交響曲”の第1弾。晴朗かつ清澄な音楽が4楽章に亘って展開され、管楽器が効果を発揮する。(S)

公演番号 H23

交響曲 モーツァルト

交響曲第25番 ト短調 K.183

17歳時に書かれた、生涯に2曲しかない短調交響曲の一つ。悲劇性が支配し、第1楽章は映画『アマデウス』で有名に。全4楽章。(S)

公演番号 C02

協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第21番 八長調 K.467

充実期の名作の一つ。輝かしい二つの楽章に挟まれた優美な第2楽章は、映画『みじかくも美しく燃え』の挿入曲としても知られる。(Ko)

公演番号 C14

協奏曲 モーツァルト

ヴァイオリン協奏曲第3番 ト長調 K.216

19歳で書かれた3曲目のヴァイオリン協奏曲。フランス的な色彩が強い。モーツァルトらしいスタイルが確立された最初期の作品。(Ko)

公演番号 H32

交響曲 モーツァルト

交響曲第40番 ト短調 K.550

三大交響曲の第2弾。モーツァルトのト短調特有の悲劇性を湛えた、ロマン派に通じる名作。全4楽章で、出だしは旋律は特に有名。(S)

公演番号 OP(第1楽章)、H14(初稿版)

交響曲 モーツァルト

交響曲第29番 イ長調 K.201

モーツァルト10代の交響曲では第25番と双璧の人気作。流麗かつ優美で、弦楽器が徐々に膨らむ冒頭部は特に印象的。全4楽章。(S)

公演番号 C12

協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第22番 変ホ長調 K.482

23番とセットで書かれた作品で、知名度は高くないが、後期作品らしい成熟した筆致が見られる。軽やかなロンドで閉じられる。(Ko)

公演番号 C13

協奏曲 モーツァルト

ヴァイオリン協奏曲第5番 イ長調 K.219「トルコ風」

19歳で書いた5つのヴァイオリン協奏曲のうち最後の曲。トルコ趣味が取り入れられていることからこの愛称がついた。(Ko)

公演番号 C32

交響曲 モーツァルト

交響曲第41番 八長調 K.551「ジュピター」

三大交響曲の第3弾。最高神ゼウスを意味する愛称通り、堅牢な造形美を誇る。中でも立体的な終楽章は傑作の誉れ高い。全4楽章。(S)

公演番号 C11

交響曲 モーツァルト

交響曲第31番 二長調 K.297「パリ」

求職旅行先のパリの嗜好に即して書かれた作品。モーツァルトの交響曲中最大の編成で、明るく華麗な音楽が展開される。全3楽章。(S)

公演番号 C14

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第4番
変ホ長調 K.282

冒頭は快活な楽章でスタートするのが当時の定番だが、モーツァルトはあえてゆったりとした緩徐楽章で開始。革新的な表現を示した。(A)

公演番号 K12

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第5番
ト長調 K.283

愛らしい表情にみちたソナタ。第1楽章はコロコロと表情を変えるところがチャミング。第3楽章は軽快に駆け抜ける。(A)

公演番号 K12

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第6番
二長調 K.284「デュルニッツ」

交響的なスケールの大きさを感じさせるソナタ。第3楽章には変奏曲形式を取り入れており、テーマと12の多彩な変奏からなる。(A)

公演番号 K12

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第7番
ハ長調 K.309

優れた宮廷楽団で有名なマンハイムを旅行中に作曲。同地の作曲家の13歳になる娘のために書かれたソナタ。(A)

公演番号 K22

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第8番
イ短調 K.310

第7番同様にマンハイムで1777年に作曲。同地の卓越した楽団の演奏に刺激を受け、ダイナミックで生き生きとした書法が光る。(A)

公演番号 K22

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第9番
二長調 K.311

1778年旅先のパリで作曲。同地で初夏に母親を亡くしている。当時のソナタには珍しく、短調の暗く激しい性格を帯びている。(A)

公演番号 K22

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第10番
ハ長調 K.330

1783年に作曲。屈託のない明るさをもった第1楽章、短調の陰りが印象的な第2楽章、軽やかな主題による第3楽章からなる。(A)

公演番号 K22

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第11番
イ長調 K.331「トルコ行進曲付き」

第3楽章は有名な「トルコ行進曲」。ウィーンで流行した異国情趣を反映し、トルコ軍の音楽を模している。第1楽章は変奏曲形式。(A)

公演番号 A11、A12(邦楽版)、K22

室内楽曲 モーツァルト

フルート四重奏曲第1番
二長調 K.285

1777年マンハイムで書かれた傑作の一つ。裕福な医師であったドゥジャンのために書かれた三つのフルート四重奏曲の中の1曲だ。(K)

公演番号 A32

器楽曲

Instrumental music

器楽曲 モーツァルト

ヴァイオリン・ソナタ第25番
ト長調 K.301

マンハイム滞在時の1778年に書かれた6曲の「マンハイム・ソナタ」の第1曲目。2楽章形式で、まだピアノが主役のソナタである。(K)

公演番号 A22

器楽曲 モーツァルト

ヴァイオリン・ソナタ第28番
ホ短調 K.304

「マンハイム・ソナタ」の第4曲目。完成したのはパリに到着後らしい。ホ短調という調性の中に様々なアマデウスの心情を感じる。(K)

公演番号 A22

ピアノ曲

Piano music

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第1番
ハ長調 K.279

ソナタ第1～6番は、19歳のモーツァルトがミュンヘンで作曲した。第1番は明るく快活なパッセージが印象的である。(A)

公演番号 K12

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第2番
ヘ長調 K.280

和音の連打で舞曲風に始まり、快活に音楽が動き出す。ゆったりとしたシチリアーノ風の第2楽章と急速な第3楽章が対照的。(A)

公演番号 K12、A31

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第3番
変ロ長調 K.281

細やかな装飾に彩られた第1楽章、下行する音型でゆったりと開始する第2楽章、語りかけるようなロンド形式の第3楽章からなる。(A)

公演番号 K12

室内楽曲 モーツァルト

弦楽五重奏曲第4番
ト短調 K.516

モーツァルトにとっての「運命の調」といわれるト短調による弦楽五重奏曲。ヴィオラが2本となる。1787年ウィーンで作曲された。(K)

公演番号 A32

室内楽曲 モーツァルト

アダージョとフーガ
ハ短調 K.546

ピアノ2台のための作品「フーガ」を元に、弦楽四重奏用に編曲し直し、その際アダージョを加えた。1788年ウィーンでの作品。(K)

公演番号 H12

室内楽曲 モーツァルト

クラリネット五重奏曲
イ長調 K.581

ウィーン時代の親友で、クラリネットの名手シュタードラーのために書かれた。1789年に初演。クラリネット奏者にとっては貴重な傑作。(K)

公演番号 A24

室内楽曲 モーツァルト

弦楽四重奏曲第13番
二短調 K.173

通常「ウィーン四重奏曲」と呼ばれる初期の作品の中の1曲。初版は3楽章形式で、先輩ハイドンからの影響を強く受けた作品といわれる。(K)

公演番号 H13

室内楽曲 モーツァルト

弦楽四重奏曲第14番
ト長調 K.387「春」

「不協和音」「狩」などの含まれる「ハイドン・セット」全6曲の第1曲目。半音階などを多用したかなり前衛的な作品ともいわれる。(K)

公演番号 AK1

室内楽曲 モーツァルト

弦楽四重奏曲第17番
変ロ長調 K.458「狩」

作曲は1784年ウィーンで。ハイドンに捧げた「ハイドン・セット」の中で最も有名な作品。サブタイトルは第1楽章冒頭の主題から。(K)

公演番号 A24

室内楽曲 モーツァルト

ピアノ四重奏曲第1番
ト短調 K.478

弦楽器3本にピアノを加えた編成は、モーツァルトの発案によるとされる。作曲当時はとても新しいジャンルだった。1785年作曲。(K)

公演番号 H13

室内楽曲 モーツァルト

ピアノ四重奏曲第2番
変ホ長調 K.493

第1番ト短調の翌年1786年に書かれた第2番。作曲時期は歌劇『フィガロの結婚』が初演された時期に重なっている。3楽章からなる。(K)

公演番号 A23

協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第23番
イ長調 K.488

1786年に書かれた第23番～第25番は、古典派ピアノ協奏曲の最高峰といわれる作品。表情豊かな美しい主題が次々現れる。(Ko)

公演番号 H23

協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第24番
ハ短調 K.491

わずか2曲の短調によるピアノ協奏曲の一つ。緊張感ある主題で始まり、モーツァルト作品の中でも特殊な情調をもつことで知られる。(Ko)

公演番号 C31

協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第26番
二長調 K.537「戴冠式」

レオポルト二世の戴冠式のため訪れた地で演奏された曲で、祝典的な雰囲気をもつ。左手が書かれていない部分が多く見られる。(Ko)

公演番号 C21

協奏曲 モーツァルト

ピアノ協奏曲第27番
変ロ長調 K.595

死の年に完成された、最後のピアノ協奏曲。澄んだ雰囲気、オーケストラとピアノが融合する新しい響きをもつ作品。(Ko)

公演番号 H22

協奏曲 モーツァルト

フルートとハーブのための協奏曲
ハ長調 K.299

フルートの名手で、ハーブを弾く娘を持つフランスの外交官のために書かれた。パリでは当時、複数の楽器による協奏曲が流行していた。(Ko)

公演番号 C12

協奏曲 モーツァルト

フルート協奏曲第2番
二長調 K.314

当時のフルートをあまり好まなかったといわれるモーツァルトだが、裕福なオランダ人の依頼で作曲。オーボエ協奏曲の編曲作品。(Ko)

公演番号 H14

協奏曲 モーツァルト

クラリネット協奏曲
イ長調 K.622

亡くなる前の月に完成。クラリネットの名手だった親しい友の演奏に啓発されて作曲。美しくほのかに哀愁漂うメロディが次々現れる。(Ko)

公演番号 C33

室内楽曲

Chamber music

歌劇 モーツァルト

なんと美しい絵姿～ 『魔笛』 K.620より

夜の女王の娘パミーナの肖像を見せられ、恋に落ちるタミーノの Aria。伸び上がりつつ緩やかに下る歌い出しが陶酔を表現する。(T)

公演番号 AK1

歌劇 モーツァルト

恋人よ、この薬で(薬屋の歌)～ 『ドン・ジョヴァンニ』 K.527より

ドン・ジョヴァンニに殴られた夫・マゼットを慰めて歌うツェルリーナの Aria。傷を治す薬だと言って、自分の胸を触らせる。(T)

公演番号 H11

ピアノ曲 モーツァルト

きらきら星変奏曲 ハ長調 K.265

フランス語で歌われていた歌曲を元に作曲したピアノ用変奏曲で、作曲は1781年から82年ウィーンで。全部で12の変奏からなる。(K)

公演番号 A31

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第12番 ハ長調 K.332

調性やリズム表現がコロコロと変化する第1楽章、木漏れ日が差すように美しい第2楽章、祝祭的な華やかさをもつ第3楽章からなる。(A)

公演番号 K22

声楽曲

Vocal music

歌劇 モーツァルト

『フィガロの結婚』 K.492

モーツァルトのオペラを代表する作品。結婚式をめぐるドタバタを描きつつ貴族社会を風刺する。1786年初演。(T)

公演番号 5/2津幡(金沢オリジナル版)、H24、C31(アリア集)

ピアノ曲 モーツァルト

幻想曲 二短調 K.397

淋しげに漂うような美しいメロディをもつ。未完で自筆譜も失われているため謎の多い作品。モーツァルトの死後、補筆、出版された。(Ko)

公演番号 A31

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第13番 変ロ長調 K.333

ウィーン時代の成熟した書法によるソナタ。第1楽章は流麗な主題が印象的。第3楽章はどこか切なさも感じさせる朗らかさ。(A)

公演番号 AK1、A11、K32

声楽曲 モーツァルト

アヴェ・ヴェルム・コルプス K.618

カトリック教会で歌われる賛歌。モーツァルトの同作品は終始穏やかに歩む曲調で、晩年の傑作。(T)

公演番号 C03、A12

歌劇 モーツァルト

愛の神よ～ 『フィガロの結婚』 K.492より

第2幕最初の伯爵夫人の Aria。夫の愛が失われゆくことを嘆くが、穏やかに明るい曲調がそのはかなさ切なさを美しく照らし出す。(T)

公演番号 AK1

歌劇(オペラ)

Opera

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第14番 ハ短調 K.457

ハ短調の劇的な主題は、ベートーヴェンの作風にも通じる緊張感を帯びている。即興的な「幻想曲」K.475とセットで扱われる。(A)

公演番号 K32

声楽曲 モーツァルト

歌曲「すみれ」 K.476

少女に憧れるすみれの花の歌。テキストはゲーテ。歌詞の物語的な展開に合わせて音楽を変化させるスタイルは、ロマン派歌曲の先取り。(T)

公演番号 A22

歌劇 モーツァルト

恋とはどんなものかしら～ 『フィガロの結婚』 K.492より

第2幕、伯爵夫人の前でケルビーノが歌うアリエッタ。純朴な曲調ながら、途中の頻繁な転調が恋に憧れる少年の心の揺れを見事に描く。(T)

公演番号 C31

歌劇 モーツァルト

『劇場支配人』 K.486より 序曲

劇場のオーディションでのいざこざを描いた音楽付き喜劇の序曲。切れ味鋭い第1主題と、歌謡的な第2主題からなるソナタ形式。(T)

公演番号 OP

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第15番 ハ長調 K.533、K.494

後期らしい精緻された響きをもつ。第3楽章となったロンドがまず書かれ、のちに第1・2楽章と合わせてソナタにまとめられた。(A)

公演番号 K32

声楽曲 モーツァルト

モテット「踊れ喜べ幸いな魂よ」 K.165よりアレレヤ

「アレレヤ」は全3楽章のこのモテットの第3楽章。ソプラノの技巧的なパッセージが、常に晴れやかな曲をさらに華やかにしている。(T)

公演番号 OP

歌劇 モーツァルト

楽しい思い出はどこへ～ 『フィガロの結婚』 K.492より

夫の不貞に悲しみ、幸福だった過去を回想する伯爵夫人の Aria。澄み切ったアンダンテが切々と迫る。最後はアレグロに変わる。(T)

公演番号 C31

歌劇 モーツァルト

『皇帝ティートの慈悲』 K.621

実在のローマ皇帝ティートを題材にした物語。ティートは自らを暗殺しようとした者たちを最後には許す。1791年初演。(T)

公演番号 H21

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第16番 ハ長調 K.545

ピアノ学習者にとっては馴染みのソナタ。生き生きとした音階のパッセージや、歌心のあるメロディが魅力的。(A)

公演番号 K32

声楽曲 モーツァルト

レクイエム 二短調 K.626

作曲者の死により未完となった作品。その後弟子が補筆完成させた。絶筆となった第8曲「ラクリモサ」は悲劇的かつ孤高に美しい。(T)

公演番号 C34

歌劇 モーツァルト

手紙の二重唱～ 『フィガロの結婚』 K.492より

伯爵夫人がスザンナに手紙を書かせるシーンの二重唱。歌詞を夫人→スザンナとリフレインさせ、口述筆記を音楽で表現している。(T)

公演番号 C31

歌劇 モーツァルト

『コシ・ファン・トゥッテ』 K.588

タイトルは「女はみなこうしたもの」。二人の男性がお互いの婚約者の貞操について賭けをする。全2幕。1790年初演。(T)

公演番号 A13(ハイライト版)

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第17番 変ロ長調 K.570

穏やかで無駄のない響きに、後期の創作における深みを感じられる。第2楽章はとりわけ心の温まる味わい深いアダージョ。(A)

公演番号 K32



クライスラー Kreisler

器楽曲 クライスラー

レチタティーヴォと スケルツォ・カプリース op.6

19世紀末～20世紀にかけて活躍したウィーンのヴァイオリニスト、クライスラー。彼の1911年の作品で、華麗な技巧を含んでいる。(K)

公演番号 A14

歌劇 モーツァルト

もう飛ぶまいぞこの蝶々～ 『フィガロの結婚』 K.492より

第1幕最後、出征させられるケルビーノに対し、フィガロがからかい半分に励まして歌う行進曲調の Aria。人気の1曲。(T)

公演番号 OP、C31

歌劇 モーツァルト

お手をどうぞ～ 『ドン・ジョヴァンニ』 K.527より

第1幕、ドン・ジョヴァンニとツェルリーナへの二重唱。ドン・ジョヴァンニの誘惑に、ツェルリーナは思わず陥落しかかる。(T)

公演番号 OP、AK1、H11

ピアノ曲 モーツァルト

ピアノ・ソナタ第18番 二長調 K.576

モーツァルトが最後まで完成させた最後のソナタ。技巧的で精緻に書かれており、古典派としての高度な演奏技術を要する。(A)

公演番号 K32

歌劇 モーツァルト

恋人よ、私を不親切な女と思わないで～ 『ドン・ジョヴァンニ』 K.527より

不満を漏らす婚約者にアンナは、愛は変わらない、だが決意もまた変わらないと歌う。コロラトゥーラの活躍する長大な Aria。(T)

公演番号 H11

ピアノ曲 モーツァルト

アダージョ 口短調 K.540

口短調で書かれた唯一の楽曲で、前年に父を亡くしたことと関係しているという説もある。哀しみを打ち明けるような音楽が流れる。(Ko)

公演番号 A22

ワーグナー
Wagner

楽劇 ワーグナー
『ニュルンベルクのマイスタージンガー』前奏曲
ワーグナーには珍しい喜劇の要素をもったオペラの壮麗な前奏曲。祝典的ムードが横溢する中、劇中の旋律が次々に登場し交錯する。(S)
公演番号 C02

パガニーニ
Paganini

器楽曲 パガニーニ
協奏風ソナタイ長調 M.S.2
ヴァイオリン界随一の鬼才パガニーニはギターの名手でもあり、ヴァイオリンとギターのための作品を残した。これは1803年の作品。(K)
公演番号 A14

ソル
Sor

器楽曲 F.ソル
『魔笛』の主題による変奏曲 op.9
ソルは「ギター界のベートーヴェン」とも呼ばれた作曲家で、この曲はモーツァルトの『魔笛』のアリアをギター用に編曲したもの。(K)
公演番号 A14

サラサーテ
Sarasate

管弦楽曲 サラサーテ
カルメン幻想曲 op.25
ビゼーの人気オペラ『カルメン』に基づくヴァイオリン小品。有名な旋律がメドレーで登場する中に、超絶技巧が盛り込まれていく。(S)
公演番号 A14

レハール
Lehár

歌劇 レハール
『メリー・ウィドウ』よりヴァリアの唄
パリを舞台にしたオペレッタの2幕、未亡人ハンナが祖国に思いをはせて歌う歌。穏やかな冬日のような旋律に憂愁のにじむ名曲。(T)
公演番号 H12

J.S.バッハ
J.S.Bach

器楽曲 J.S.バッハ/ブラームス
無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとバルティータ第2番「シャコンヌ」
バッハ「無伴奏ヴァイオリンのためのバルティータ第2番」の終曲「シャコンヌ」をブラームスが左手のピアノ曲に編曲した作品。(K)
公演番号 A33 (ピアノ版)

ドビュッシー
Debussy

ピアノ曲 ドビュッシー
版画
アジア、スペイン、フランスを想定した、「塔」「グラナダの夕べ」「雨の庭」からなる。作曲家未踏の地を、想像から描写した作品。(Ko)
公演番号 A11

ヨハン・シュトラウス2世
J.Strauss II

管弦楽曲 J.シュトラウス2世
ワルツ「美しく青きドナウ」
1867年にヨハン・シュトラウス2世が作曲した合唱曲。後に管弦楽だけでも演奏されるようになったウィンナ・ワルツの代名詞的作品。(K)
公演番号 C03、H12

ロッシーニ
Rossini

歌劇 ロッシーニ
『ウィリアム・テル』よりスイス軍の行進
シラーの戯曲『ヴィルヘルム・テル』を基にした4幕のオペラ。13世紀末、スイスの独立を目指す人々の物語で、特に序曲がよく知られている。(編)
公演番号 C23

ベートーヴェン
Beethoven

交響曲 ベートーヴェン
交響曲第9番二短調 op.125「合唱付き」
交響曲に声楽を融合させた画期的名作。有名な「歓喜の歌」が登場する第4楽章では、平和や人類愛が壮大な規模で歌い上げられる。(S)
公演番号 C03 (第4楽章)

ドビュッシー
2つのアラベスク第1番

ピアノ曲 ドビュッシー
2つのアラベスク第1番
ドビュッシー初期の作品。アラベスクとは、元はアラビアの工芸品の唐草模様のこと。メロディが絡み合うさまがその模様を思わせる。(Ko)
公演番号 A21 (ハーブ版)

シューベルト
Schubert

交響曲 シューベルト
交響曲第7番口短調 D.759「未完成」
前半2楽章のみ完成され、没後37年経って発見された人気交響曲。美しい歌と瑞々しいロマンに溢れ、管楽器の活躍も特筆される。(S)
公演番号 C32

その他
Other

箏曲
六段の調べ
江戸時代前期に活躍し、近代箏曲の祖と言われる箏曲家・八橋検校が作曲。代表的な箏の独奏曲だが、胡弓や尺八などとの合奏も多い。(編)
公演番号 A12

ホルムベスク
Porumbescu

器楽曲 ホルムベスク
バラード(望郷のバラード)
愛国運動で囚われたルーマニア人作曲家が、獄中で故郷と恋人への想いを綴ったヴァイオリン用の小品。天満歌子の代名詞でもある。(S)
公演番号 AK3、C23 (管弦楽版)

ハイドン
Haydn

交響曲 ハイドン
交響曲第104番二長調 Hob.I-104「ロンドン」
1795年ロンドンで初演されたハイドン最後の交響曲。雄大で濃密な内容は、古典的交響曲の完成形と呼ぶにふさわしい。全4楽章。(S)
公演番号 C02

スクリャービン
Scriabin

ピアノ曲 スクリャービン
左手のための前奏曲と夜想曲 op.9
モスクワ音楽院在学中、過度な練習で右手を故障した際に作曲。繊細な技巧で、ロマン派の影響色濃い歌うメロディが奏される。(Ko)
公演番号 A33

